

今回の教育実習では、実際の教育現場に行ってみないとわからない多くのことを学んだ。本レポートではそれらの感想、反省点を以下のようにいくつかのポイントに分けて述べていきたい。

### ○授業を通して学んだこと

授業を通して最も感じたことは、授業作りの大変さだ。私は高校一年生の国語担当で、土佐日記『門出』を扱った。『門出』にはチェックすべき文法事項が多くあり、また諧謔表現など内容の部分でも伝えたいことが多くある教材であるため、子どもたちに一時間の授業でどれだけのことを伝えればいいのか非常に悩んだ。研究授業までに三度他のクラスで授業をさせてもらい、その度に何を伝え、何を生徒に問うのか取捨選択を繰り返した。しかし、結局まとまりきらないまま研究授業を迎えてしまい、多くのことを一気に伝えすぎた授業になってしまった。先生方からも「多くのことを言いすぎてメインがわからなかった」「生徒が考える時間をとれていなかった」などのフィードバックをいただき、反省点を確認することができた。もう一度、研究授業という一時間のものに縛られず時間をかけて『門出』を扱うとすると何を伝えていきたいか想像を膨らませ、授業を組み直してみたい。先生方は一年間を通して生徒にどれだけのことを学んでもらうか、という長い目で見て授業作りを行っておられるということを強く感じた二週間だった。

### ○生徒との交流の中で学んだこと

生徒との交流を通して感じたことは、子どもたちは本当に多くの表情を見せてくれるということだ。笑顔で話しかけてくれたり、授業や特別活動で真剣に考えていたりとさまざまな様子を見ることができ、これが教師のやりがいなのだろうと感じた。私の実習校では宗教教育があり、〇〇会という修業へ行く行事がある。それを直前に控えた生徒たちが不安そうに話している場面も見られたので、そこは先輩としての視点で経験談を話すなど不安を和らげるような声掛けを心がけた。

また、中高一貫校であることから中学一年生から高校三年生までの子供がいる環境だったため、学年に応じた話し方や、流行について知っているかという点にも敏感になって行動しなければならないと感じた。

### ○職員室や教官室での様子から学んだこと

この二週間、人生で初めて「職員室」という環境で過ごして気づいたことは、教員には本当に多くの仕事があるということだ。生徒と関わる授業のことだけでなく、成績処理や入試広報など様々な業務を教職員で分担していた。このように全員が協力し合うことで学校が成り立っているということがよくわかったので、私自身もしっかりとやるべきことを把握し、自分の役割を果たすことができる人間になろうと改めて強く思った。

そして何より、先生方は常に生徒のことを考えて行動しているのだなとわかった。職員室で聞こえてくる会話はいつも生徒についての内容だった。成績に関することや人間関係の悩みを抱えた生徒について、

教員同士で情報をシェアし、全員で生徒を見守るという体制作りが重要だと感じた。

### ○教育実習全般にわたって

教育実習全体を振り返って特に良かったと感じることは、たくさんの方々と関わることができたことだ。研究授業には国語科の先生はじめ、元担任や部活動の顧問など私をよく知ってくださっている先生方、そして同じ立場の実習生など多くの方に見にきていただいた。それぞれの立場からフィードバックをいただけたことは今後の授業作りに向けてとても貴重な経験になった。

また、多くの授業見学にも行かせていただいた。担当である国語だけでなく自分が受けていなかった科目の授業も見学することで、初めて授業を受ける生徒の目線になることができた。このように、自ら積極的に多くの授業、先生方と関わろうと行動できたことが最も良かったと思う。

反対に後悔していることは、研究授業を完璧に行うことをゴールにしてしまったことだ。教材研究など基本的なことは徹底してできたが、研究授業の練習だけが主になってしまい全体的な計画を考えきれていなかったように思う。そのため、「このグループワークを先に行う方が良かった」など後から全体計画への後悔が生まれてしまった。もっと生徒観も深めることで、子どもたちに何から伝えていけばいいかに重点を置ける教員にならなければならないなと感じた。

教育実習では子どもたちから「先生」と呼ばれ、教師として働くことを実感した二週間だった。この経験を活かし、これから先子どもと関わる全ての機会でお手本となるような大人になれるよう、残りの学生生活も努力していきたい。